

入選

綺麗な水と私達

三重県 高田学苑高田中学校

二年 湯川実咲

小さな頃の思い出は？と聞かれて真っ先に思い浮かぶのは、テーマパークのきらびやかな装飾よりも、キャンプに行った山に流れる川の涼しげな音や、従兄弟に手を引かれながら見た蒼い海だ。

海、川、湖など、自然の中に在る「水」を私達は美しいと感じる。透明で、さらさらと流れ、ひやりと冷たかったり、じわりと温かかったりする水。そんな綺麗な水は、私達の身体を生かし、心を癒してくれる。地球が青くて美しいのも、青くて美しい水があるお陰だ。水は私達の生活になくてはならない。

だからこそ、たまにふと思う。もしも水がなくなったら、私達はどのようなだろう。よく考えたら、自分は水についての知識なんてほとんど持っていないから、自分が好き勝手使った水がどうなるのかなんてよく分からない。それでも私は今まで水を使っていた。水の無い生活なんて、知らないのだ。テレビでは見たことがある。はつきりとは記憶に無いが、私よりも年下だと思われる外国の男の子が、わずかな量の泥水を飲んで、嬉しそうに笑っていた。その少年は美味しそうに飲んだけれど、私から見たらそれは泥水だった。

そんな光景を思い出してやっとなんか自分には少ない場所では生きていけない、どうしようもないと確信する。じゃあどうすればいいかというと、今ある水を守るしかない。

そこで、自然の水がどうやって私達の生活の水に変わるのかを考えてみると、それは自然の水が消毒され、私達の体に入っても大丈夫なように浄化されて、生活の水になるのだ。つまり、その技術がなければ私達に水は使えない。もともとたどれば、水を貯めるダムがなければ水は供給できない。普段何も考えずに使っている水は、多くの人間の苦勞によってもたらされているのだと思うと、水は重い。それから、私達が使った後の水はどうなるのか。人間の生活の汚れを流した水は、下水道を通じてまた浄化され、海へ流れる。海水は蒸発して雲となり、またどこかで雨を降らせて大地に戻ってきてくれる。大雑把にしか分

からないが、自然の循環は本当に凄い。だがその一方で、私達はいつ水不足に悩まされるか分からない。雨が長いこと降らなければ、ダムの水も尽きてしまふのだ。だから私達は、水の無駄使いをしてはいけない。水は循環しているけれど、広い地上のどこに還されるか私達には決められない。

水の無駄使いにも色々あるが、まずは自分の気持ちの行き届く範囲で改善していきたい。当たり前なことだけど、手を洗う時、顔を洗う時、水を出しっ放しにしないようにこれからも気をつけたい。それから今我が家で試されているのは、お風呂は時間を空けずに次々入ること。余分なお湯が沸かないし、少しは無駄が削れるはずだ。その他にも、言い出したらきりが無い程、水を大切に

する術はある。

それからもう一つ、私達は綺麗な水を海に還さなければならない。また水を浄化する設備のない所では、汚水をそのまま海に流しているらしい。それは当然、人間を含め多くの生物に悪影響だ。だから、全ての地域で浄化設備を整えれば良いと願う。そして、全ての国で、美しい水が飲めるようになれば良い。茶色く濁った水ではなくて、透き通った安心して飲める水。

自然のままの水は美しい。その美しい水をこれ以上汚さないように、なくさないように、私達は何かできるはずだ。

大切な資源を未来の地球に残すため、努力する義務が私達にはある。

入選

「先人の知恵と工夫と三方よし」

―「かばた」に学ぶ水環境―

滋賀県 守山市立守山中学校

三年 高橋 篤史

―朝起きて、身支度を済ませる。急いで朝食を食べて家を出る。ここまでは何の変化もない、いつもと同じ朝だ。唯一、日本の朝と違っていたのは、学校までの道のりの途中で、毎日、必ず六百ミリリットルの水が入ったペットボトルを一本買うことだった―。

これは昨年、夏休みをアメリカのミシガン州で過ごした兄から聞いた話だ。初めての外国での生活で、戸惑うことが多かったらしいが、ホームステイ先で兄が最も違和感を覚えたのは、水に関する文化の違いだったという。まず、水道水は全く飲まない。気候が良いのでバスタブは使わず、シャワーのみ。洗濯や食器洗いは、当然のように機械任せにするなど水の使い方にあまり関心が無い。滋賀県と同じく、大きな湖を有するミシガン州だが、そこに住む人々の水に対する意識は、私たちのそれと比べると、ずいぶん希薄なものだと兄は感じたらしい。

そんな兄の話聞いて思い出したのは、以前、家族で訪れたことのある琵琶湖博物館で見た、「滋賀の昔の生活風景―『かばた』のある暮らし―」だ。昭和三十年代頃まで、琵琶湖周辺には「かばた」と呼ばれる水路システムを持つ家が、たくさんあったそうだ。現在でも湖西の一部の地域に、この「かばた」が残っている。学芸員の方の話によると、当時は今と違って生活用水に琵琶湖の水を使用しておらず、川の水や井戸水を主に使用していたということだった。皆が同じ川の水を使うため、人々は水の使い方、捨て方に様々な工夫を凝らしたそうだ。家の中を通る水を二種類に分け、片方で食器や野菜を洗い、もう片方の水を、仕上げ洗いや料理などに使う、というように、水の使い方の区別をする。他にも、衣服の洗濯に使った水は川に流さず、風呂の残り湯や用便とともに畑の肥料に使っていたと聞いた。驚いたことに、こうした当時の人々の水利

用に関する様々な工夫は、琵琶湖や河川の水質を意欲しての行動ではなく、「近所の住民への配慮から生まれた工夫だった」と学芸員の方はおっしゃっていた。川の上流に住む人が、下流に住む人も同じように気持ちよく水を使えるように気を配る。残飯や野菜くずは、川で飼っているコイのエサになる。このように、「かばた」は無駄をなくしつつ、人々の間に「水に対する信頼」を築いている。それと同時に、知らず知らずのうちに自然と同じ立場に立ち、環境を大切にしようとする心が人々の中に備わっていたのではないだろうか。

昨秋、私は母と共に津市内で開催された「世界学生湖沼会議」のパネルディスカッションを見に行った。この会議は、世界十か国から集まった大学生が、湖沼の環境保全や環境教育のあり方などを話し合うもので、日本の学生からは、琵琶湖の固有種の減少と水温との関係について報告があった。この日は、「もったいない」ですっかりお馴染みになった嘉田由紀子知事も、ネリストの一人として参加されていた。嘉田さんは、環境社会学者としても知られている。

「環境の問題は地域に暮らす生活者の視点から考えることが重要」
この日の記念講演の中で嘉田さんは、こう述べられた。この考え方は先に書いた「かばた」システムに共通するところがあると思う。

昔から、滋賀県には「売り手よし」、「書い手よし」、「世間よし」の『三方よし』という近江商人の言葉がある。商いは当事者だけでなく、世間のためにもなるものでなくてはならないという教えだ。これを水環境に置き換えると「自分よし」、「相手よし」、「環境によし」、と言える。このように自然と共生し、水を大切に使うことで三方の間に信頼関係も生まれるのではないか。これこそが、水資源を守る大切な一歩になると私は考える。

入選

守ろう、命の水を……

京都府 立命館宇治中学校

一年 マクドナルド 恵美理・マーガレット

その日私は、地球上に住む生物にとってかけがえのない水の大切さを思い知らされました。何不自由のない生活の中で地球のどこかで、水が足りなくて不自由な暮らしをさせられ、悲鳴を上げている人々のいることを考えたことがあるでしょうか。その命の水がないために、たくさんの人々が病気になるり死んでいることを知っていますでしょうか。

それは何年前だったでしょうか。ビデオを見ようとしてテレビのスイッチを押した時、思いもしなかった映像を目にしたのです。六歳ぐらいだったでしょうか。その少女は、自分の頭よりも大きなつぼを頭の上のせ、四キロの道のりを家族のためにひたすら歩いているのです。幼い私は、最初何をしているのだろうかと思いました。でも、その少女がいた場所を見てやっとなりが付きました。泥だらけの池……。その池の泥水を少女は、自分の持つて来たつぼにくんでいました。その時、テレビ番組の方が少女にインタビューしていました。

「あなたはなぜここに来たのですか。それだけの水で足りるのですか。」
そこで、思いもしないびびくりするような答えが返ってきました。
「家族のために必要な水をくみに来ました。少ないかもしれないけど、私たちが家族に今日必要な量の水だけでよいのです。この村の人々も共同で使っている水ですから、取りすぎると皆の分がなくなってしまうので……」

私はその言葉を聞いたとたん、なぜか知らず知らずのうち涙があふれ出てほほを伝わっているのに気づきました。私と少ししか違わない年齢なのに、こんなに家族や他の人たちに思いやりを持ちやさしく接しられる少女に敬意の念と偉大さに感動させられたのを覚えています。

この日からまるで世界が変わった様でした。今までそんなに考えもしなかった水の存在について、考えるようになりました。大切な命の水をむだに使ってはいけないと思うようになりました。例えば手や顔を洗う時、歯をみがく時などむやみやたらに水を出しっぱなしにせず、止めるように気をつけました。私

より幼いかもしれない少女が、四キロの道のりを往復して家族に持ち帰る命の水。帰りは水が入った重たいつぼを、しかもはだして……。その映像は、私の心の中に強烈に入り込み消えることは決してありませんでした。

同じ地球上に生まれて来たのに、こんなにも環境が違うのに、自分の生まれて来た環境の中でがんばって生きぬく姿の輝きと美しさ。この少女のように私もがんばって生きぬかなくてはと思います。自分のできる精一杯の命の水への協力。私のように恵まれた環境に育って来た子にも、少しは協力できるはずです。自分たちで限られた資源の命の水を有効に使う努力をすること。雨水の利用。自然破壊につながる森林のむやみやたらな伐採を止めることなど身近なところから取り組むことも大切なことだと思います。

原始的な暮らしの中では、自然と共存して生活して来たのが、近代化が進み便利になるにつれ、その自然との共存とのバランスがくずれ、自然破壊へとつながって来ています。でも、今一度考え直さないといけない時期が来ていることに、どれだけの方が気づいているでしょうか。自分たちの住む地球を良くするのも悪くするのも私たち次第です。皆さんも思いませんか。地球の未来が良い方向に向かって行く事を願っていませんか。一人では何も出来ませんが、地球上の人類が少しずつでも協力し合えば、いつか大きな成果が出るに決まっています。"Let's do it together!"

みんなで命の水を大切に使うことを、いっしょに考えましょう。

入選

「いのちの水を大切に」

香川県 綾川町立綾南中学校

一年 芋坂明日香

「ブルブルブル、カタカタカタ…」

日曜日の朝、納屋から聞き覚えのあるエンジンの音がしてきました。あつ、あの音は田植え機だな。今年も、はやそんな時期になったのかと思いつながらのぞきに行くと、

「今年も田植えの手伝い頼むぞ、明日香。この冬は雨が多かつたけん、夏には雨が降らんかもしれんなあ。」と、父が心配そうに言いました。

私はこの春、学校の校外学習で、高知県の早明浦ダムに行きました。まず、想像をはるかに超えたその大きさに圧倒されました。高さ百六メートル、横幅は四百メートルもあるそうで、さすが「四国の水がめ」と呼ばれるだけあるなあと感じました。ここに蓄えられた水が香川用水を経て、私達の生活にうるおいを与えてくれるんだと思うと、とても嬉しく、ありがたい気持ちになりました。

また、建設費においては、約三百三十億円もかかったということにも驚きました。四国四県が協力体制を作って取り組んだおかげで、このような立派なダムが完成したことを知り、本当に早明浦の水は「四国のいのち」なんだと、改めて深く感じました。

米作りにも、私達人間にとっても、動物や植物にとっても、水は欠くことのできない大切な物です。水が無ければ生きてゆけません。今までそんな大切な水を、何も考えずにあぶさんに使っていたことが、何だかとても恥ずかしくなりました。

現在はこの家庭にも水道が通っていて、水を使えるのが当たり前という時代です。水道もなかった昔はどうしていたのだろうと思いつ、祖母に聞いてみました。

「うちに水道がついたんは、確か昭和三十四年頃だったんかいなあ。当時は各家に井戸があつて、生活用水ぜんぶその水でまかないよつたんや。ほいで、

農業用水はため池の水を使いよつたんや。昔は今みたいに減反ものうて、ほとんどの田んぼで耕作しよつたけん、今より水の使用が厳しくて限りある水を大切に使いよつたん。池の水は上方から順番にわたされる「番水制」で、順番が夜中に回ってくることもあつて苦労したんやわ。でも、中には水を少しでも多く引こうとする悪い人もあつて、しよつ中けんかがありよつたん。今は香川用水のおかげで、昔のような苦労をしなくて済むから本当に助かるわあ。」と、祖母は嬉しそうに話してくれました。昔は本当に大変だったんだなあと思うとともに、今自由に水を使うことができる幸せを実感しました。

ところで、限りある水を大切にするためには、節水や様々な工夫が必要です。そこで、家庭でできる事を考えてみました。私がすぐにでも始められるのは、水の出しっぱなしをやめること、使う水の出を調節することです。早速、今日から始めよう！その他にも、洗たくに風呂の残り湯を利用したり、食器洗いの時にはため洗い、さらに油ものは洗う前に油をふき取る、洗車はバケツ洗い、節水型家電製品を購入する、植木への水やりには雨水を利用するなど、家族一人一人ができる範囲で気をつけると、かなりの節水が期待できるのではないのでしょうか。

香川県は雨が少なく、昔から水不足に苦しんできました。昭和四十八年の「高松砂漠」、平成六年にはそれを上回る「平成の水ピンチ」、さらに一昨年のかつ水も家庭生活や社会活動などに大きな打撃を与えました。私の住む綾川町でも念仏踊りをして雨ごいをしました。私達の使っている水には、水源地の人々の思い出がつまっています。その人々に感謝しながら、先人の知恵や工夫を生かして、皆で節水を心がけていきたいです。

やがて田植えが始まります。早明浦の貯水率が気になるところ…今年もおいしいお米がたくさんとれますように。

入選

命の水

佐賀県 佐賀県立香楠中学校
一年 松隈 光里

私達は水が無いと生きていけません。私達の生活に水は、絶対にかかせないものです。私は今回水の大切さを考えていくうえで、自分の家の蛇口の数を数えてみました。台所には水道水用と井戸水用が一個ずつあります。そして洗面台には一個、お風呂場にはシャワーをあわせて四個もあります。外にも三個あるので全部あわせて十個もあります。改めて自分が恵まれている環境にいることを痛感しました。

以前テレビでアフリカの子供達やアジアの子供達が平気で泥水を飲んでる姿を見たことがあります。とても信じられないという思いがしたけれど、その子供達は生きていくために泥水を飲むしかないという現実を知った時に、強い衝撃を受けました。生きていくために飲んでる泥水によって多くの命が失われている事実はとても悲しいことだと思います。しかし、その現実から私達は多くのことを学び気付いていかなければならないのではないのでしょうか。自分分のできることは何なのかを考えてみました。シャワーや歯みがきの時の水の出しっぱなしは、もう何年も前から節水のためのスローガンとして、言われ続けていたため、すでに多くの人が実行していることだと思います。実際に私も、常に心がけ実行しています。けれど、それだけでは節水しているとは言えないような気がします。それには、今の生活様式と昔の生活様式のちがいが大きく関係しているのではないかと思えます。例えば、よく晴れた天気の良い日には朝から何回となく洗濯機が回され、洗剤は合成洗剤がほとんどで、トイレに関しては水洗トイレが当たり前になっています。しかし昔は、洗濯はたらいに水をためて洗っていたし、洗濯板が石けんの代わりとなっていました。トイレは、水を流さずにすんでいました。こう考えると、改善していかなければならないことは無限にあると思います。気付いた今の瞬間から、始めることが大事だと思います。

私達は、水のない生活を体験したことがありません。幸いにも鳥栖には、宝

満川があり十分な恵みをうけることができていると思います。私が生まれてからの十二年間、一度たりとも水不足の危機に直面したことは無いのです。こういう恵まれた環境にいるがゆえに感謝する気持ち忘れてしまいがちです。一人ひとりのほんの少しの心がけで、水のむだ使いはなくなっていくのではないのでしょうか。

世界のあちこちに、私よりもずっと小さいたくさんの子供達がきれいな水を飲むこともできず、苦しんでいるのです。それを知った今、どうして水を無駄にできるでしょうか。難しく考えるのではなく、中学一年生の私にもできる範囲で実せんしていくことが、必要だと思います。ほんのわずかなことでも、長く続けていくことが大切だと思います。お風呂の残り湯は、トイレの流し水や植木ばちに再利用することができます。シャワーも、極力ひかえていこうと思います。いつもは全開に開く蛇口も、水量をおさえて使うように心がけていかなければならないと思います。長く続けていくためには、家族と協力しあって水に対する意識を高めていくことだと思います。

私達が毎日おいしく飲んでるこの水は、永遠ではありません。限りがあるのです。だからこそ、一人一人がきちんと向きあって考えていく努力をしなければいけないと思います。これから先の未来のために、がんばっていきたくです。

水は私達の命です。

入選

熊本の水

熊本県 熊本市立三和中学校

二年 高木精華

「あー、生き返ったー。」

部活の練習時間に水を飲んだ時の第一声だ。私は吹奏楽部でクラリネットを吹いている。何曲も繰り返して吹いていると、口びるは痛くなるし、のどだつてカラカラになってしまう。今、体育大会での演奏と夏のコンクールに向けて、毎日、一生懸命練習しているところだ。

「水を飲みに行ってきた方がいいですか？」

そう先輩に聞いてから、急いで手洗い場に向かう。そして、ふと、蛇口をひねれば出てくるこの水は、実は天然のミネラルウォーターだったということに思い出した。普段、何も考えずに使っているこの水は、世界に誇れるくらい素晴らしい地下水なのだ。

よその町が水不足の時でも、熊本市では断水の経験がないと聞いたことがある。火山列島を象徴する「火の国」の名前を持つ熊本だが、同じように「水の都」とも呼ばれている。

熊本市の水道水は、阿蘇の自然の恵みと熊本地域特有の水循環のおかげで、百パーセントが地下水でまかなわれている。水をたくわえている地層が天然の浄化フィルター役をするのでミネラルなどがバランスよく溶け込んでいる。このことを、私は昨年、この水の作文を書いたことで知ることができた。私が住んでいる城山地区にも、城山水源地があり、そこからくみ上げられた地下水は、城山配水池より各家庭に配水されている。私達が安心して二十四時間使えるために、さまざまな管理が行われている。良質な地下水が水源なので、浄水処理の必要がほとんどなく、私達はそのままの美味しい水を飲むことができる。

同じ三和校区の池上地区には、味生の池の伝説がある。味生の池は、和同の時代にかんがい用に作られたため池だが、今はもう埋め立てられている。しかし、歴史的にも有名な味生の池は、水の神聖さと共に今でも語り継がれている。

熊本市が指定している「ひご野菜」は、熊本京菜、水前寺もやし、熊本長にんじん、ひともじ、ずいき、れんこん、水前寺菜、春日ぼうぶら、芋の芽、熊本赤なす、熊本ねぎ、水前寺せり、熊本いんげん、熊本黒皮かぼちゃ、水前寺のりの十五品目だ。清らかなわき水のおかげでおいしい野菜が育ち、辛子れんこんのような郷土料理が生まれている。他にも、清酒、焼酎、ビール、赤酒、ワイン、しょう油、酢。これら全てが一つの都市で造られていることは、とても珍しいことだそう。さらに、スイカ、メロン、いちご、梨、みかん、トマトなどの農作物のみずみずしさを頭に思い浮かべた時、水が関係していることに気づいてとてもびっくりした。熊本の水は本当にすごいと改めて思った。

しかし、地下水の量は減ってきている。都市化が進み、水の使用量が増加しているからだ。だから、生活用水の削減に努めることはとても大切なことだと思ふ。私達は、天然の恵みである地下水を毎日の暮らしに欠かせない水道水として、何気ない気持ちで使っている。まずは私達ひとりひとりが、きちんとした意識を持つことがとても大切だと思ふ。ほんの少しの心がけで、使う水の量はずいぶん減るのではないだろうか。私は学校でも隣の人が使っている蛇口を、「節水、節水！」と言いつつ、よく閉めている。小さいことだけど大事なことだと思ふ。そしてこの地下水が、大量にトイレに流されていることも、考えてみればとてももったいない。何かの処理水を使うことができたらいのにと思っている。天然のミネラルウォーターを未来に残していけるように、まずは身近なところから意識をして生活していきたいと思ふ。

入選

「身近な水辺環境と暮らし」

大分県 大分大学教育福祉科学部附属中学校

二年 土肥謙則

僕が通った小学校では、近くに大きな川と水路のような小さな川がありました。大きな川の川原には、年に二回、全校で遠足に行き、みんなでドッジボールをしたり、ゲームをしたりして楽しんでいました。その川原には、歩道が整備されて、散歩をする人や、マラソンをする人がいたり、たくさんの方が花壇のように植えられており、いつも人で賑わっています。又、夏にはそこで花火大会もあり、僕は、年中通してその川と共に過ごしてきたような気がします。

反対に小さな川では、度々ボランティア活動や学校の総合学習で、河川掃除に参加した程、汚れています。どれだけゴミ拾いしても、次の清掃活動の時には、また大量のゴミが捨てられています。近くに、コンビニやスーパーがたくさんあり、高速インターの近くなので、ペットボトルやお弁当の残り等がたたくさん捨てられています。拾っても拾ってもきりがありません。その小さな川は、小さいなりに護岸工事がなされていて、下に降りる事ができないようになっていきます。

僕は、川の大きさではなく、川への人々の意識の違いが身の周りの環境に大きな影響を与えているのではないかと考えました。この間の河川愛護デーでの清掃活動で、近所に昔から住んでいる年配の方が、「昔はホタルがいたし、川の形もすっかり変わった。」と言っていたのを聞いてとても驚かされました。その時、何人かの方々が口々に昔の川の様子を懐かしそうに話しているのを聞く中で、僕は一つの事に気がつきました。この小さな川は、昔は遊ぶことができ、ホタルが飛びかう程きれいだったそうです。夏の暑い日には、みんなで川に足をつけたりホタルを捕ったりして地域の憩いの場としての役割も果たしていた事がわかりました。

では、なぜそのままの状態ではなくなったかという、台風による氾濫のためです。長い時間をかけて、上流からの水の量と、下流の排水整備が行われ完全に人の入ることのできない水路へと変わってしまいました。これはこれで、

ここに住む人たちの生活の安全が守られた一つの成果だと思っています。台風の時期に被害を受けずに過ごしていくことも生活していく上では大切な事です。でも川の心配が無くなり、川に人が集うことがなくなったことが、川への意識の低下につながってしまったことも事実です。

人々が関心を寄せなくなった川は汚れ、川の表面には油が浮いています。人がいなければ、通りすがりの人が汚れた川にゴミを捨てて行きます。どれだけ看板を立てても意味がありません。今からどう頑張っても地域の方の話す昔の川に戻ることは難しいのではないかと思います。暮らしを守る事が逆に生活環境を破壊してしまうなんて、矛盾している様な気がします。でも僕たちはボランティア活動を通じて、川を守り続けていかなければなりません。すぐにきれいな川に戻らなくても、川の清掃活動を通じて川への意識が高まる事が大切だと思えます。長い時間をかけてでもこの川に携わり、いつかまた昔の川のように人々が交流する場となるに違いありません。今年川のそばには桜を植えました。この桜はまだまだ小さいけれど、この桜が大きくなる頃には川もまた僕たちの生活の中になくはならない大切なものと変化していくと信じています。

入選

命をつなぐ水

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

二年 中本 奈那

「いただきます。」

待ちに待った昼食の弁当のふたを勢いよく開け、まず手がのびるのはおにぎり。口いっぱいにはおぼると、ほんのりとした甘さが口の中に広がっていきま

す。私にとってこの時が一日で一番幸せな瞬間です。

なぜなら、このおにぎりは農家である我が家の祖父母と父と私の四人で丹精

込めて作ったお米でにぎったおにぎりだからです。

遡ること一年前。お米作りの最初は、発芽しやすいようにもみを一晚ぬるま湯につけることから始まります。次に育苗箱に膨らんだもみをまき、さらにたっぷり水をまきます。待つこと一週間。白くて、かわいらしい芽が光を求めて顔をだします。それからハウスで毎日水をまく日々です。「大きく育って、おいしいお米になれ。」と新鮮な水をたっぷりまきます。こうして苗たちはやっ

とハウスから脱出し、田んぼへとやってきます。

さあ、これから苗が育つ田んぼを準備しなければなりません。田んぼは、まず、トラクターで荒起こしして田んぼ一面に水を引きます。次に水がもれないように畔ぬりをし、水で土をやわらかくするために肥料をまいて中耕をします。最後に植え代かきをします。

こうしてやっとな準備を終えて、いざ田植えとなると、嬉しくてたまりません。手植えをするときに、田んぼにはられた透き通った水に足を入れた瞬間、足全体に水の冷たさが、ピンと伝わっていきます。一本一本丁寧に、これからたくましく育ってほしいという願いを込めて植えます。田んぼは追田で、棚田と比べて日照時間がとても少ないのですが、棚田では不足しがちな水は比べものにならないくらい豊富にあります。それは周りが森林に囲まれていて、木の根がたっぷり水を蓄えてくれているからでしょう。

田植えが済むと、整然と並んだ苗たちが無事に育つように、毎日たんぼに行かなければなりません。田んぼの上のほうにある池から水を引き、次々と追田

に自然がつくりだした水が満たされていきます。これらの実りの季節まで、水の調節は欠かせません。水の恵みを受け取った苗は、日々成長していき、やがて稲の穂の高さは腰の位置ほどになります。

稲刈りの時期に入ると、田んぼ一面が緑から黄金色に変化した姿を見ることができま

す。池の中を見ても、確実に水の量が減っているのが分かります。私は、このとき初めて稲作で必要とする水の量が計り知れない、ということに気づいたので

す。約半年かけて大事に育ててきたお米を口にするときの嬉しさは、格別です。お弁当のおにぎりも、家で茶碗に盛られたごはんも、一粒一粒が白くつややかに輝いています。

考えてみると、私たち日本人にとってお米は主食として太古の昔から大切にされてきました。稲作は日本人が欠かすことなく続けてきた伝統文化です。それは、日本の自然が豊かな水に恵まれていたからこそ続けられてきたのではないのでしょうか。日本人は、稲を大切にすると同じように、水も守ってきました。水を守ることが、命をつなぐことになるからです。

目の前にあるのは、当たり前前の水。しかし、それは決して「当たり前」ではないのかもしれない。今、水質汚染、水不足といった悲しい現実を耳にすることがよくあります。そういった話を聞くと、命をつなぐために大切に守り続けてきた水への感謝の心が、なくなってきたのではと心配になります。私たちはこれからも、水に感謝し、大切に守り育てていかなければなりません。私たちの命がつながっていくのと同じように、水も豊かにそこに在り続けるよう、努力をしていきたいと思

います。

入選

生活を支える豊かな水

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

二年 黒木楓子

「こんな事、当たり前だよ。節水、節水。」
「節水」という言葉が身近に感じられるようになったのは、母のこの言葉を聞いてからでした。

私が初めて水不足を経験したのは、夏真盛りの台風の時でした。当時小学校四年生だった私は、校舎の一階が水びたしになったと聞いて、とても不安な気持ちになったのを覚えています。テレビでは何度も浸水のニュースを見ていましたが、「まさか、自分の学校がなるなんて：。」という驚きは大きなものでした。それよりも怖かったのは「水が出ない」ことでした。いつものように学校から帰って手を洗おうと蛇口をひねった私は、「あれ？。」

蛇口から全く水が出ないことに気づいたのです。そのときの驚きは今でもはつきりと覚えています。その後、家中の蛇口という蛇口を全てひねったのですが、水は出ませんでした。その日から、水のない生活が始まりました。

母は毎日のように店へ水を求めに行き、被害の少なかつたえびの市から、いところが水を届けてくれるようになりました。もちろんお風呂にも入れず、銭湯へ行ったのですが、そこでも水が止まっていました。少量の水で石けんを泡だて、冷たい水で体を流しました。水が止まると、温かいお風呂さえもなくなるのだと思い知らされました。トイレも水を節約するため、何回かに一度しか流せませんでした。私達の「普通」の暮らしが、どれだけたくさんの水に支えられているのか、改めて実感しました。

一週間ほどの間、水のない生活をしていたのですが、気づいてみれば、少ない水での生活を、それほど苦に感じるものがなくなっていました。初めはほんとうに一日一日が大変だったのにと、自分でも驚きました。しかし、考えてみると、今のような水をふんだんに使う生活を始めたのは、つい最近のことです。ほんの三、四十年前には、水洗トイレはもちろん、洗濯機もないところもあつたのですから。それを考えれば、私達の今の生活は、とても恵まれている

と言えます。毎日きれいな水が好きだけ飲めて、汚れた服も簡単に洗うことができるのです。水のありがたさと、水を失っては生活そのものが危うくなってしまうという危機感とを、同時に知った経験でした。あれから四年たった今でも、このときの水不足の経験は、強く印象に残っています。

つい先日の朝のこと、弟がトイレトペーパーの出しすぎで、トイレをつまらせてしまったことがありました。母が急いでかけつけて、流そうとしている所を、私は興味本位で見っていました。そのとき、母は便器の上の手を洗う部分はずして、中からペットボトルを取り出したのです。私は心底驚いて、なぜそんな所にペットボトルがあるのか、と尋ねました。すると母は、

「ここにペットボトルを入れておくと、流す水が減るんだよ。こんな事、当たり前だよ。節水、節水。」と言ったのです。母がそんな事をしているとは全く知らなかつた私は、驚くとともに、母のことを誇らしく思いました。私の母はきちんと節水をしているのだ、と。そして、そのことを当たり前だ、と言えるのだ、と。

「快適な生活を我慢するのではなく、自分の生活を見直すだけでいい。それが大切だ。」という言葉聞いたことがあります。豊かな水に恵まれ、また、高度な技術によって、私達は生活できています。しかし、それらはいつ失われるか分からない危うさと共にあるのです。実際に世界の国々では、そうした恵みを受けられずに苦しんでいる人々がたくさんいます。自然の恵みを受けられることは幸運であり、また責任を伴うものだ、ということをお忘れず、自然の恵みを育んでいきたいです。

入選

誇り高き屋根の上のタンク

鹿児島県 池田学園池田中学校

二年 祖堅真衣子

私は一年前、私立中学校に入学するため、沖縄から鹿児島市にある中学校の寮に入った。鹿児島に来てまず驚いたのは、家々の屋根がスマートであるということだ。

私の生まれ育った沖縄では、どの家庭にもコンクリートの屋根の上に必ずと言っていいほど、貯水タンクが置かれている。それは日本中どこでも当たり前前の光景なのだろうと思っていた。鹿児島での不思議な発見のことを母に話すと、「初めて沖縄を訪れた人にとっては、屋根の上にタンクが置かれている光景は驚きなんだよ。」と話してくれた。沖縄だけなのか…と私の方が驚いてしまった。

それで、「何故、沖縄にだけ屋根の上にタンクがあるのだろうか。」と興味がわき、父母にもっと詳しく沖縄の水事情について話を聞いてみた。すると、私が沖縄の水事情に対して知っていたことは、間違いであったことが分かった。

私は、沖縄は困りが海に囲まれているから、水がたくさんあり、降水量も全国に比べて比較的多いので、「水不足」なんて全く縁が無いと思っていた。でも、それは違っていた。

梅雨や台風で多くの雨が降っても、森林が少なく、川も短いため、雨水は海に流されてしまうのだ。確かに、初めて鹿児島に来たとき、沖縄には無い雄大な緑の山々に感動した。沖縄では北部の「山原」という所でしかほとんど森林は見あたらない。そのため、最近はまだ見られなくなったが、昔は断水に見まわれることもしばしばあったということだ。蛇口の水をひねれば必ず水が出てくるのが当たり前と思っていた私には、とても考えられない。このような理由から、昔から井戸を掘ったり、雨水をためて水を大事にしてきた。

そして今も屋根の上にタンクを置いて水をためているというのだ。何ということだ、すごいと思った。沖縄の人たちは私が生まれるずっとずっと昔から現在まで、このようにして水を大切にしているのか…。沖縄に生まれ育った者と

して誇りに思わずにはおれなかった。

沖縄の水問題以外にも、母はこんな話をしてくれた。

「日本の水道水はおいしいんだよ。水道水がそのまま飲めるといって国は世界でも珍しいんだよ。」

母は話を続けた。外国は硬水が多いが、日本は軟水だそう。そのまま飲めるし、料理などにも使える日本の「水」はとても貴重だと、自慢げに教えてくれた。

はたして自分はどうだろうか。お風呂の水は出しっぱなしだし、手洗いでも水を止めないし、無意味に水を使っていることが多い。

幼い頃から水遊びが大好きな私は、どれくらいの水を無駄にしていたか。「水なんて、いくら使っても減らないでしょ。」なんて、大きな勘違いをしていた。でも、中学生となった今は、水不足を少しづつ考えるようになり、「節水」を心がけている。

「屋根の上のタンク」…少し不恰好だけれど、この光景は多分、この先ずっと変わらないだろう。沖縄では「梅雨」「台風」の時期に雨の日が集中するため、二つの時期を過ぎて雨が降らなければ、水不足になり、ダムの貯水量が減ってしまう。自然が相手だから、人間の力ではどうにもならない。そういう沖縄で育ったからこそ、水不足についてもっと真剣に考え、一人一人が水の大切さを声を大にして伝えていかなければならないと思う。

沖縄に帰省し、あちこちに見られる「屋根の上のタンク」を目にすると私は何故かほっとする。私たちの先人が叡知を結集し、水を大切にしてきたことで私たち生物の命をつないできたことを思い、故里がますます好きになった。屋根の上のタンクは沖縄の誇りだ。

入選

生活の水、命の水

沖縄県 宮古島市立砂川中学校

一年 砂川 智菜津

水は、地球上にいるすべての生き物にとって大切な存在です。私たちの生活の中でも、とても身近なものです。水は蛇口をひねれば簡単に出てくる、どこでも簡単に買うことができる時代。「水は大切」という当たり前のことに気づかない人もいるのではないのでしょうか。

私の住む城辺・砂川は、一面に畑が広がり、多くの人が農業と関わって暮らしています。学校帰りにさとうきび畑にスプリンクラーが散水している様子や、雨あがりに農作物が葉にしずくをのせ、生き生きとしている様子。そんな見慣れた景色の中から、私はいつも水の力を実感していました。また、地下ダムの建設により、降水量の少ない時期には、干ばつに悩まされていた城辺は、こつこつと守り続けてきた農業をさらに発展させることができました。農業と生活と水の関わりを知ること、もつと地域の水の歴史について知りたいと思うようになりましした。

また、私の祖父母が幼い頃は、水道がありませんでした。そのため、「友利のあま井」という自然の洞窟から湧き水をくむのが女性や子供たちの日課だったそうです。深さ二十メートルの暗やみのむこうにある水を目指して、階段を一日何回も上り下りしていたことを考えると、今水道があることが本当に便利なのだと感じます。あま井の階段の途中の手すりは、つるつるになっていて、それだけ多くの人に利用されていたのだということ、今も知ることができます。このようにしてくんだ水は、みずがめに保存し、家族で大切に分け合って飲んでさうです。祖父はその時のことを思い出し、「プスイグル、プスイグル、ウマムヌヤ。(冷たくて冷たくておいしい。)」と話してくれました。宮古にはこのような湧き水や井戸が数多くあり、人々はそこで命を育て、水に感謝して過ごしてきたのだらうと思います。祖父から話を聞いて、ほんの少し昔を振り返るだけで、水を求めての苦労や感謝を知ることができました。また、祖父から一枚の古くなった感謝状を見せてもらいました。それは一九五四年に、祖父が役場

の人々や六人の仲間たちの協力を得て、あま井を水源とする友利地区と砂川地区の簡易水道工事を終えたときにいただいたものだそうです。ほとんど自分たちの手で道具を使って工事をし、約一年以上をかけて簡易水道を完成させたそうです。それから水道が各家庭に普及するまで、その簡易水道が、友利・砂川地区の生活の源として、人々の役に立っていたのです。「やつとできた水道だったから、うれしかったさあ。」と、祖父はうれしそうにほほえんでいました。その色あせた感謝状が祖父とともに誇らしげに輝いていました。今の私たちは、蛇口をひねれば簡単に水を手に入れることができます。しかしそこには、水を求めて苦労した人々の思いがあることを忘れてはいけなと思います。

祖父から教えられた、水の大切さと水を得るための苦労。今度は私がそれを語りつぎ、誰かに伝え、水を守り続けていく番だと思えます。水を守るためにできること。それは、「責任を持つ」ことだと思えます。当たり前前に身近にある水が、どのように私のもとにやってくるか、そしてどこへ流れていくのか。自分の行動が環境や水にどんな影響を与えるのか。それを立ち止まって考えてみる必要があると思います。水が身近な存在になったのも、祖父だけでなくもつと昔の先人たちの、水と共に生きる歴史があったからだと思います。水と共に生きていくのは、現代の私たちも同じです。水を守るために自分にできる小さなことから始めてみる。それは、水への感謝の気持ちを忘れず、共に生きること。水を守り、生活を守り、命を守ることと同じです。私たち一人ひとりに、その責任と守っていく力があると思えます。

入選

当たり前から

沖繩県 伊江村立伊江中学校
三年 渡久地 桃香

『大西の特牛や なさきやうらと好きゆる 我島若者や 花と好きゆる』
この歌は、私達の住む伊江島の中でも、名勝地として有名である湧出（わじい）の石碑に刻まれた歌碑です。歌意は、「大西の特牛は、なさきやうらが好きであるが、われわれ島の若者は美童が好きである。」という意味です。湧出について『伊江島村史』で調べてみると、「島の北海岸六〇メートルもある断崖の下にある。海中にあるので、干潮時に汲んだ。飲料水に適する不思議な水である。昔から島の大事な水源地とされてきた。村内の井戸が涸れるとここに頼った。村内から三キロある。岩間を通って行くので苦労した。小さな人が一人通れる道があった。」とありました。

蛇口をひねれば水が出る。私は、水がいつでもあるのが当たり前の生活を送っています。今回、先生からの勧めがあり、伊江島の「水」について調べるきっかけがありました。これまでの島の、地域の、そして親の苦労を知ることができました。

島での歴史を振り返ってみると、現在のように簡易水道が普及するようになったのは、海底送水工事の完成が大きいことがわかりました。それは、三十二年前の一九七七年のことでした。「永年水不足に苦しんだ村民は、この歴史的大事業といえる本部く伊江島間の海底送水工事の完成によって一気に解消された。」とありました。

それから後、伊江島でも水が無くて困った時期があったというのを父から聞きました。一九八六年の六月から八月にかけて、伊江島でも、二十三年ぶりの大干ばつがあったそうです。隔日断水があり、タンクのある家は対応できるのですが、一日ごしでしか、水道から水が出ない日があったんだそうです。飲み水の確保が最優先になるのであり、当然農業用水には手が回らなくなります。

私の家は農家で、菊の花を作っています。水がなければ父の仕事も成り立ちません。伊江島の菊栽培は、昭和六十年から本格的に始まり、当初はほとんど

溜め池もなく、水の確保に大変苦労したそうです。今では、約四十箇所以上の溜め池があり、さらに調べていくうちに、個人の溜め池まであることがわかって、驚かされました。島であるがゆえに、土地は限られています。その中で、農業の発展には水が必要で、本来農地として使いたい場所にも溜め池を作らざるを得ない状況があります。島の農業では、他にも牧畜や葉たばこ、サトウキビと、それを使ったバイオエタノール事業、島らっきょうなど多くの広がりを見せています。

また、農業だけでなく、観光産業においても大きな関わりがあります。イベントを中心とした観光産業の中心とも言えるこの「ゆり祭り」です。今年で第一四回を数えました。先日行われた伊江マラソンは、一七回を数えています。

島では今、地下ダム建設中で、平成二五年に完成予定とされています。この地下ダムについても、発展していくために必要なものなんだということを感じさせられました。限られた水を、土地を有効活用していくためにも、早くこのダムが完成し、島の農業や観光産業が一層向上することを願う気持ちでいっぱいになりました。私の生まれた島が魅力に溢れる島であり続けて欲しいと強く願います。

私達は、水からの恵みを受けながら、生活をしているのにも関わらず、水や水を取り巻く環境に無頓着で無関心すぎると思います。この取り組みを進めるうちに、水の恵みを当たり前のものとして流すのではなく、「当たり前の水」が確保された苦労の歴史を知り、感謝する気持ちが大さだと思いました。この事を、みんなにも伝え、多くの方に、水に対する感謝の機会に出会って欲しいと思います。

入選

水の大切さ

フランス パリ日本人学校
一年 當間 竣

私たちは小さい頃から「自然、水、限りある資源を大切に」ということを教えられてきた。特に「節水」に関するポスターは、今まで通ったどの学校にも必ず貼ってあった。ブラッセル日本人学校では四年生の時に現地の浄水場を見学した。蛇口をひねると出る水がどのようにして浄化されているのか、浄化設備を造るのに莫大な費用がかかることを知り、水を大切に使うなければいけないと思った。水道水は大切な水という感覚だった。

地球は水の惑星といわれ、海洋の面積は陸地の約三倍もある。水はいくらでもあると思われがちだ。しかし海水は塩水であり、海の水をそのまま飲み水にしたり、植物を育てることはできないのだ。私たちに必要なのは、雨水や河川の水、地下水なのだ。

私たちはダムや貯水池をつくり、一年を通して生活用水を確保している。そのもとである川の流れは、どうしても枯れないのだろうか。その秘密は森林にあるという。

雨が降ると森林はすこしずつそれを地下へおくりこみ、やがて地下水となる。三百年も五百年もかけゆつくりと地下をくぐってきたわき水は、集まって谷川になり、小さな川になり、やがて大きな流れになって平野をうるおしてくれる。私たちは今、江戸時代の水も飲んでることになるそうだ。そして日本は少しくらいの日照りが続いても水がたえなかつたのは国土の七割を占める森林のおかげなのだ。もし森林がなければ雨が土に浸み込まず、地表をすべりおち、たちまち洪水になってしまう。そして、大切な雨水が一日で海に流れてしまうことになるのだ。私たちは森林という自然のダムにも支えられていたのだ。蛇口をひねると出る水には、長い歴史があり、その水を大切にすることというこ

とに深い意味があったのだ。
僕は今、フランスのパリに住んでいる。パリでまず驚いたのは、道にゴミや犬の糞が多いことだ。そして時々散水車が道路や歩道に勢いよく水を撒き、それらを流し、掃除する。すぐに糞やゴミが目につくようになるが、また散水車

が大量の水を撒き掃除するという繰り返しの光景で、撒いている水も見た目はとてもきれいだ。フランスでは水道代が安いと聞いた。

パリの前に住んでいたベルギー（ブリュッセル）は隣国だが状況は違う。水道代が高いのだからベルギー人は訪問先でトイレを使わない。トイレの水を使うことになり、失礼になるのだ。しかし、現地のサッカークラブやプールのシャワールームでは、皆ボディソープを使い、一生懸命体を洗う。自宅のシャワーはなるべく使わず節約（節水ではない）しているようだ。

幼い頃住んでいた、シンガポール・タイのことを両親に聞いてみた。シンガポールは隣国マレーシアからパイプを引き水を買っている。しかし、水道代が高くないのか、シンガポリアンの多くが住む公団アパートのキッチンには、ホースで水を流しながらタイルの床を掃除する。排水口があるのだ。タイ人のお手伝いさんも浴室やベランダには、水をどんどん流し掃除をしていた。この二つの国は、熱帯雨林気候に属するので、敷地内に大きなプールがあり、一年中泳げた。

このように、生活様式、水の値段、考え方によって生活用水の使い方は違うが、水を大切にしようという意識は低いと思う。僕も含め危機感がないのである。

世界に目を向けると、米国、中国では、河川が干上がる水不足に直面している。帯水層からの過剰な汲み上げが大きな原因だ。世界の水の使用内訳は七割が灌漑用水、二割が工業用水、一割が生活用水である。水不足に直面することは食料不足に直面することである。

これから僕たちは、どうすればよいのだろうか。全体の1割の生活用水ではあるが、僕たちが今、身近な所から水の大切さを考え、水とつきあっていけば、大人になった時に地球規模で水を理解し、考え、行動できるようになれると思う。